

お茶うけ 第40話

長岡輝子の朗読 - ざしきぼっこの話

女優として、演出家として、戯曲の翻訳も手がけて、舞台上に映画にテレビにと活躍していた長岡輝子は、NHKの連続テレビ小説「おしん」で加賀屋の大奥様役を好演してから日本中の茶の間にも広く知られるようになりました。奉公人おしんに、自分の孫娘と同じように文字などを教え、その成長を温かく見守った、頼もしくて賞賛十分な演技を記憶している方も多いと思います。

その後長岡輝子は、NHK教育テレビの「授業」という番組で、母校の盛岡師範学校附属小学校で後輩にあたる子供たちに、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」や「ちゃんがちゃんがうまこ」などを、お婆さんが自分の孫たちに話すように、地元の東北なまりで朗読して聞かせました。私はその朗読に魅せられ、もう一度聞きたいものと思っていました。

その長岡輝子の朗読の会があると知り、昨年の12月の半ばに銀座の王子ホールに行きました。輝くような白髪と真紅のドレスで装った長岡輝子は、会場の客にこやかに微笑みかけながら、宮沢賢治の詩(上記2編を含む)や短編、与謝野晶子の「君 死にたもうことなかれ」、高村光太郎の「智恵子」などを読んで聞かせました。中でも私のお目当ての宮沢賢治の詩の朗読は、東北なまりで賢治のおもしろみを生かし、おばあちゃん言葉のリズム感と温かさを持った素晴らしいものでした。



長岡輝子は、詩人の心を詩の朗読で人々に伝えるには、詩人の生きた時代を理解し、同じ空気を吸い、同じ言葉を使うことが大切と考えています。宮沢賢治と長岡輝子は同じ干支(えと)のサル年で輝子は一回り下であり、賢治が中学生の時に輝子は幼稚園に入る頃でした。しかも盛岡にいた輝子の身近な人達が賢治の詩に登場していたのです。

また盛岡の家において畑など外回りの仕事をしていた爺やは、畑仕事のない冬の夜などに、輝子に昔からの言い伝えや自身の不思議な体験を話しました。その中には、夜暗くなって水を汲むときは、井戸の神様を驚かさぬように、必ず井戸端で柏手を打つことや、爺やが飛脚をしていた若いころ、山の中で狐が木の葉を使って若い女に化けるのを見た話がありました。

長岡輝子は子供の頃、父の友人の福元のおじちゃんが、声色入りで手振り身振りおもしろく話す「ジャックと豆の木」などを夢中になって聞きました。輝子は、私がいまだに子供たちに話をするのが好きなのは、あの福元のおじちゃんから受けた感動が、いつも心に蘇ってくるからかもしれないと言います。

これらの総てが熟成されて朗読に生かされるので、長岡輝子は、伝承や昔話を元にした作品を、現実味を持って生き生きと朗読できるのだと思います。

昨年の朗読の会では、宮沢賢治の「ざしきぼっこ(童子)の話」もありましたが、長岡輝子が語りますと、大きな農家の座敷の真ん中に、今でもざしきぼっこが顔を出すような気になるから不思議です。

「ざしきぼっこの話」には、4つの短い話がありますが、私が子供のころから好きなのは、子供たちが輪になって遊んでいるところに、それが現れる話です。

ある家のお振舞い(客を呼んでご馳走すること)に招かれた、ちょうど10人の子供たちが、両手をつないで輪になって、「大道めぐり、大道めぐり」と囃しながら、座敷の中をぐるぐる回って遊んでいました。夢中でぐるぐる回って遊んでいると、いつの間にか11人になりました。

「ひとりも知らない顔がなく、ひとりもおんなじ顔がなく、それでもやっぱり、どう数えても11人だけおりました。その増えた1人がざしきぼっこののだぞと、大人が出て来て言いました。けれどもだれが増えたのか、とにかくみんな、自分だけは、どうしてもざしきぼっこでないと、一生けん命眼を張って、きちんと座っておりました。

こんなのがざしきぼっこです。」

(『宮沢賢治集(上巻)』古谷綱武編 新潮文庫 1949年7月10日発行 P-175より)

以上

ざしきわらし(座敷童子):

屋内に現れる子どもの姿をした妖怪。家の神の形を変えたもので、いたずらだが、富をもたらすという。おもに東北地方に分布する伝承。(講談社 日本語大辞典)

参考文献:

『父(パッパ)からの贈りもの』長岡輝子著 草思社刊 1984年3月21日第1刷